

9期 知らなかった あんな話 こんな話 科

～そして生きがい再発見～

日時： 令和3年12月 2日

場所： 豊中市地域共生センター

学習テーマ：「織田作之助の作品と将棋」—坂田三吉を中心に

講師： 斎藤理生先生（大阪大学大学院 文学研究科教授）

内容



斎藤理生（まさお）先生（大阪大学情報より）

織田作之助は大阪市内の生まれ。作品の登場人物は一癖あるが、どこか庶民を感じさせる人間臭さにあふれているのが特徴。

坂田三吉は堺の人である。文字を知らず棋譜も読めず、これといった師匠も持たないが、将棋にかけては天才だった。織田作之助は、この坂田三吉を題材とした作品を通して、自身の想いを重ね、文学が目指す方向「可能性の文学」について追究している

織田作之助と坂田三吉

織田は将棋好きで、その用語を使って表現することもあった。

文芸推薦となった『夫婦善哉』は織田の代表作の一つだが、本人は「手のない時に突く端の歩に過ぎず、近代小説の可能性を拡大するための端の歩ではなかった。」と書いている。

この「端の歩を突く」将棋の差し手は坂田三吉が、昭和12年に木村名人と花田八段を相手にした対局で、二局とも第一手に型破りの奇手—端の歩を突くに出て棋界をあっといわせたもの。それを描いたのが『聴雨』と『勝負師』である。

2. 『聴雨』と『勝負師』—坂田に重なる「私」

『聴雨』は坂田三吉（関西名人自称問題がこじれて長期ブランクを余儀なくされ六十八歳となっていた）と若い木村義雄（東京方）の対局の話。坂田は最初の手で、端の歩を突く意外な手に出た。当時病気と孤独に苦しんでいた「私＝織田」は、この一手がもつ青春に幸福感を感じた。しかし、坂田は近代棋戦の威力に負けた。自分の藝境を貫いたまでの話だが、大衆の人気を博した坂田将棋の亡霊に憑かれていたことは確かであろう。

「私」はこの棋戦を想い、坂田に重なる自分を感じていた という内容。

『勝負師』は花田との対局。木村に負けた坂田は「私」の予想に反して、花田に挑戦した。そして第一着手に、再び端の歩を突いた。けれど、それが再び坂田の敗因となり、人々から嘲笑的な陰口を叩かれることになった。

3. 1946年の将棋界と『可能性の文学』

織田は死ぬ間際に評論『可能性の文学』を書いた。坂田の端歩突きのような常識に縛られない手法が、戦後の日本文学においても取り組まれるべきだと主張。

「坂田が実験した端の歩突きは、善悪は別として、将棋の可能性の追究としては、最も飛躍していた。ところが、日本の文壇を考えると、今なお無気力なオルソドックスが権威を持っていて、老大家は旧式の定跡から一步も出ず…」と批判し、「最近私はこの

オルソドックス（志賀直哉を念頭に置いている）に挑戦する覚悟がついた。『可能性の文学』が果たして可能か、その追及をしたい。一行の虚構も毛嫌いする日本の伝統的小説とははっきり決別する必要がある。」と主張。

坂田の端歩突きを権威への挑戦と考え、自らもそこに系譜づけた。

また、将棋と小説はいずれも新聞の大衆化に欠かせぬものとしての共通点があり、織田が坂田に共感するところがあった。

織田はこの『可能性の文学』を実践しようと試作を始めたが、戦後間もなく 33 歳の若さで病死している。生きていたら、どんな作品を書いたであろうと思う。

※講師が若く、歯切れのいいテンポの講義で面白く分かりやすかった。

小説の読み方が少し深まったように思う。

午後

1. ラジオ体操

2. 午前の講義の振り返りと各般の発表

若い講師のテンポよい講義、作品の重要な個所の資料が好評だった。

織田と坂田についての権威への姿勢、大阪の東京に対する思いなど活発な意見が交わされた。

3. 班活動

○12月23日 午後の懇親会についての連絡と役割確認

○成果発表会についての話し合い